

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.157

2006年6月

平野総長が中華人民共和国を訪問 — 第4回日中学長会議に出席 —



目次

●ニュース

平野総長が中華人民共和国を訪問 — 第4回日中学長会議に出席 — 2

平成18年度春の叙勲受賞者決まる — 本学関係者5名が喜びの受賞 — 4

森 郁恵理学研究科教授が猿橋賞を受賞 4

名古屋大学役員研修会「広報セミナー」を開催 4

平成18年度「大学教育の国際化推進プログラム」に採択される 5

「科学技術関係人材のキャリアパス多様化促進事業」に採択される 5

日本数学コンクールフォローアップセミナー「数理ウェブ」を開催 6

株式会社三省堂書店から留学生に図書への贈呈 6

●知の未来へ—若手研究者の紹介—

植物の成長を支える隠れたプレイヤーたち 7

松林 嘉克（大学院生命農学研究科助教授）

●知の先端

自動車制御システムのリアルタイム性解析 8

高田 広章（大学院情報科学研究科教授）

宇宙とはなにもなのか：最新の宇宙像 10

松原 隆彦（大学院理学研究科助教授／高等研究院教員）

●教育のデザインとプラクティス

楽しく学ぶ —身近なものに目を向ける— 12

伊藤 秀郎（医学部保健学科教授／検査技術科学専攻主任）

●世界につながる

材料電磁プロセシングの世界拠点の構築 14

浅井 滋生（大学院工学研究科教授）

●キャンパスクローズアップ

こずもす保育園 16

●部局ニュース

名大物理 COE が東京で公開講演会を開催 18

文学部60周年に向け記念の植樹 19

地球水循環研究センターがユネスコ IHP 研修コースを実施 19

公開シンポジウム「流域で見る洪水ハザード」を開催 20

留学生に向けた地震防災対策 20

全学技術センター装置開発系に感謝状贈呈 21

博物館野外観察園の見学会を開催 21

●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成18年4月16日～5月15日 22

●博物館からのお知らせ

第9回名古屋大学博物館特別展「スポーツと名古屋大学 —する・みる・つくる—」 24

博物館で「おもしろ博物学」の連続講座が始まる 25

●イベントカレンダー

●ちょっと名大史

第11回名大祭 —1970年代の名大祭— 28

— 平野総長が中華人民共和国を訪問 — 第4回日中学長会議に出席 —





平野総長と杉山副総長は、5月9日（火）から11日（木）までの3日間、中華人民共和国西安市において開催された「第4回日中学長会議」に出席するとともに、12日（金）には、上海の学術交流協定校等を訪問し、今後の国際学術交流促進について打合せを行いました。

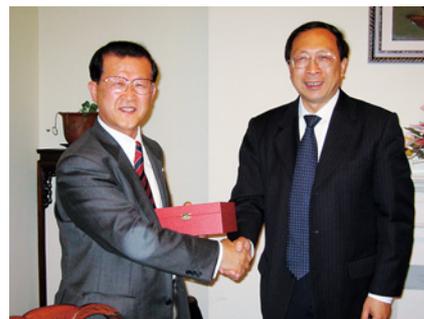
日中学長会議は、中国教育部と文部科学省との間で合意された日中教育交流に関する5ヵ年計画に基づいて開催されているもので、第4回会議には、中国側から教育部並びに本学の協定大学である北京大学、清華大学をはじめ、16大学、日本側から文部科学省、日本学術振興会、大学評価・学位授与機構並びに15大学（国立12、私立3）が参加して、「グローバル化およびアジア地域協力背景の下における日中大学の全面的協力の体制と方法」を議題として、日中間の大学連携を促進するメカニズムと方法について検討しました。

開会式では、西安交通大学鄭学長からの歓迎あいさつの後、中国教育部章新勝副部長、陝西省陳德銘省長ほかから祝辞があり、文部科学省の近藤文部科学審議官からは日本の高等教育改

革についての説明がありました。会議では、①「グローバル化とアジアにおける地域合作背景での中日大学による全面的な合作のメカニズムとルート」、②「中日大学連携による高層人材の育成と留学生の交流の強化について」、③「中日大学間の科学研究合作と学術交流の強化について」の3テーマについて活発な討議が行われました。

第2セッションは、平野総長と復旦大学王学長の司会により行われ、討議では両国大学間の単位互換や学位認定の可能性をめぐる意見交換の後、各大学の発表を踏まえ、高レベルの大学間学生交流を強化するためには外部資金を導入する必要があることが再確認されました。

全体では、日中の高レベルでの交流協力体制を中心に、共同事業の展開を効果的に促進する方法について話し合われるとともに、各大学が実施している様々な国際交流事業の紹介を交えながら、東アジア地域の共同リーダーとして戦略的なパートナーシップ関係を構築する必要性と意義について共通の認識を得ることができました。なお、次回の日中学長会議は、2007年に、東京



大学において開催することとなりました。

また、11日の午前、平野総長と杉山副総長は、本学の協定大学である北京大学の許智宏学長、西安交通大学の徐宗本副学長、浙江大学の潘雲鶴学長、南京大学の洪銀興書記らとそれぞれ30分ほど懇談し、今後の実質的な交流協力を促進するための課題について懇談しました。

翌12日、上海では、平野総長一行は、まず復旦大学を訪問し、王生洪学長と会見し、精密有機化学、環境学等の分野での学術連携の可能性について意見交換を行い、その後、上海交通大学において、謝繩武学長と会見し、学術連携の推進について懇談した後、上海交通大学110周年設立顧問委員会委員としての招聘状が贈られました。

| | | |
|---|---|---|
| | 2 | 3 |
| | | 4 |
| 1 | | |

- 1 第4回日中学長会議の様子
- 2 第4回日中学長会議参加大学の記念撮影
- 3 第4回日中学長会議での植樹記念
- 4 上海交通大学謝学長との会見の様子

平成18年度春の叙勲受賞者決まる

－ 本学関係者5名が喜びの受賞－

平成18年春の叙勲の受賞者が発表され、本学関係者では次の方々が受賞されました。

瑞宝中綬章

清家政一郎 名誉教授（工学部）
元大同工業大学教授

瑞宝双光章

杉浦 茂次 元学生部次長

瑞宝中綬章

住友 宏 名誉教授（農学部）

瑞宝単光章

山口 政江 元医学部附属病院看護部看護師長

瑞宝中綬章

鈴木 旺 名誉教授（理学部）
元愛知医科大学教授

森 郁恵理学研究科教授が猿橋賞を受賞



森 郁恵理学研究科教授

森 郁恵理学研究科教授が、第26回猿橋賞を受賞しました。本賞は、「女性科学者に明るい未来をの会」により、自然科学の分野で優れた研究業績をあげた女性科学者に贈られるものです。

森教授の受賞業績は、「感覚と学習行動の遺伝学的研究」で、体長1mmの小さな線虫を用い、感覚刺激による学習のメカニズムを解明したことが、脳の機能の解明につながるとして評価されたものです。

なお、授賞式は、5月27日（土）、東京の霞ヶ関ビル内の東海大学交友会館で行われました。

名古屋大学役員研修会「広報セミナー」を開催



セミナーの様子

4月24日（月）、豊田講堂第一会議室において、トヨタ自動車株式会社専務取締役の金田 新氏を招いて「広報セミナー」が開催されました。本セミナーは、各分野の有識者を招き、役員等を対象に講演を行い、各種業務についての理解を深める役員研修会の一環として行われました。

当日は、金田氏による「名古屋大学のイメージ実態と広報活動の方向性」と題した講演が行われ、外部から見た名古屋大学のイメージ分析や、これからの本学の広報活動の方向性等について助言をいただき、総長をはじめ理事、監事、総長補佐等出席者は熱心に耳を傾けていました。

平成18年度「大学教育の国際化推進プログラム」に採択される

文部科学省「平成18年度大学教育の国際化推進プログラム」が選定され、本学から3件が採択されました。採択されたプログラムは下記のとおりです。

○海外先進教育実践支援

海外の先進的な教育実践等をもとに教育内容・方法等の改善に資する取り組みを支援するもの。

(全90件中31件採択)

【プログラムの概要】

取組名称：FD 活動の国際化による大学教育の質的向上

取組単位：大学全体

○海外先進研究実践支援

教職員の教育研究能力等の向上により教育研究の国際化及び高度な人材育成に資する取り組みを支援するもの。

(全340名中250名が採択)

【プログラムの概要】

取組名称：国境を越えた社会貢献の基盤構築プログラム

取組担当者及び取組名称：

・山田邦夫生命農学研究科助手

「豪州原産花きの日持ち特性に関する研究」

・谷口光隆生命農学研究科助教授

「輸送体を基盤とした環境耐性・生産性の向上」

・市川康明環境学研究科助教授

「地盤環境学における物理化学現象の解析」

○戦略的国際連携支援

大学等が自らの特色を生かし、海外の大学等と教育研究活動で連携し、国際的な共同プログラムを実施するなど、総合的な国際教育活動の取り組みを支援するもの。

(全78件中5件採択)

【プログラムの概要】

取組名称：人脈形成型の国際連携法学教育環境の構築

取組単位：学部単位（法学部）

連携先大学等：ウィスコンシン大学、復旦大学、

リンツ大学、モンゴル国立大学等

「科学技術関係人材のキャリアパス多様化促進事業」に採択される

文部科学省「平成18年度科学技術関係人材のキャリアパス多様化促進事業」に本学が採択されました。

本事業は、大学・企業・学協会・NPO等がネットワークを形成し、人材と企業の交流・情報発信、ガイダンス等の実施、派遣型研修など、ポストドクター等の若手研究者のキャリア選択に対する組織的な支援と環境整備を行う取組を、文部科学省から受託して実施するものです。

なお、本事業は応募のあった全38件の中から、産学の有識者からなる「科学技術関係人材のキャリアパス多様化促進事業企画評価委員会」で審査され、8機関が採択されたものです。

【事業の概要】

実施計画名：

博士学位取得者に対するノン・リサーチキャリアパス支援事業

連携協力機関名：

名古屋工業大学、豊橋技術科学大学、自然科学研究機構（分子科学研究所、基礎生物学研究所、生理学研究所）、三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社、中央青山監査法人、株式会社日本総合研究所、NPO法人バイオものづくり中部、財団法人名古屋産業科学研究所、独立行政法人国際協力機構、独立行政法人国際農林水産業研究センター

取組概要：

本学産学官連携推進本部及び農学国際協力研究センターが中心となって、ガイダンス、基礎研究、個別コンサルティングなどを実施します。また、三菱UFJリサーチ&コンサルティングなど協力実績のある連携機関と協力してインターンシップ等の研修先、就職先の発掘を行います。

(関連ホームページ

http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/18/04/06041005.htm)

日本数学コンクールフォローアップセミナー

「数理ウェブ」を開催

「数理ウェブ」が4月22日（土）14時から、多元数理科学研究科棟（理学部1号館）509号室において、開催されました。

これは、良問にじっくりと取り組む機会を設けることで、中・高校生に数学を楽しんでもらおうと、毎年8月に開催している「日本数学コンクール」のフォローアップセミナーとして、年に10回程度開催しているものです。



小島講師による講演を熱心に聞く参加者

今回は、小島彰二東海学園講師による「無限と連続について」の講演と、大沢健夫多元数理科学研究科教授による「偶然と確率（D. アクセル）を読んで」の講演が行われ、約45名の数学愛好家が参加しました。また、中・高校生や数学関係者に混じって一般市民も参加し、熱心に耳を傾けていました。



講演する大沢多元数理科学研究科教授

株式会社三省堂書店から留学生に図書への贈呈

株式会社三省堂書店から、本学に在籍する私費留学生を支援するために学習・研究用図書贈呈の申し出があり、4月14日（金）、同社理事の茂木光則氏他3名が本学を訪れ、山本副総長列席のもと、4名の留学生に図書が贈呈されました。

これは、「三省堂書店私費外国人留学生学習援助制度」の一環として行われたもので、11年前から関東、関西地区で実施してきたものを、昨年度から名古屋地区に事業拡大

され、本学の留学生に贈呈されたものです。

茂木理事からは、「日本で学ぶ留学生に図書を進呈することによって、学習援助の一助となり、日本での留学目的が達せられれば幸いです。この図書を使って、今後とも研究活動にいつそう打ち込んでください。」とあいさつがありました。

これを受けて、留学生からは、「研究図書は高価なものが多いので、大変助けになります。この図書を使って、ますます研究をがんばります。」と抱負とお礼が述べられました。また、山本副総長からも、「図書の援助は私費留学生にとって大変な励みになります。」と感謝の意が述べられました。



留学生に図書を贈呈する茂木理事



記念撮影

植物の成長を支える隠れたプレイヤーたち

大学院生命農学研究科助教
松林 嘉克

るペプチドには PSK のように何らかの生理学的意味が込められていると考えられます。翻訳後修飾を目印に植物細胞培養液に蓄積しているペプチド群を検索すれば、単なるタンパク質断片と区別しながら新しい機能分子を見つけることができるかもしれません。実際に細胞培養液を網羅的に解析してみると、そういった候補が見出されます。細胞と細胞の間には、植物の成長を支える隠れたプレイヤーたちがまだまだ潜んでいるに違いありません。

多細胞生物の細胞分化や組織の恒常性の維持には、自律的なプログラムに加えて、分泌型シグナルの相互作用を基盤とした細胞間のコミュニケーションが必要です。動物ほど高度な器官分化の見られない植物では、細胞間の局所的コミュニケーションに参与する分子の数は比較的少ないと従来考えられていましたが、シロイヌナズナのゲノム情報から推測されるホルモン様ペプチド分子や受容体様タンパク質の数は多くの研究者の予想を上回るものでした。しかし、ホルモン様ペプチド分子の場合、それらをコードする遺伝子がゲノム中に複数重複して存在していたり、実際の活性本体が、しばしば翻訳後修飾やプロセッシングによって遺伝子情報からは直接予測しにくい形になるため、遺伝学的な解析の網にかからないものが少なくありません。

私たちのグループがこの領域に足を踏み入れるきっかけとなったのは、植物培養細胞の密度依存的な増殖現象の原因物質を解析していた際に、チロシン硫酸化という少し珍しい翻訳後修飾を受けたわずからアミノ酸のペプチドに巡り会ったことでした。ファイトスルフォカイン (PSK) と命名したこのペプチドは、*in vitro* (試験管内)において植物細胞の増殖や再分化を顕著に促進する作用を示します (図1)。PSK は、通常は難しい木本類細胞からの植物体再生にも効果があることから、産業的応用への道も拓けてきました。PSK は、培養細胞だけではなく植物個体でも成熟組織を中心にかなり発現しています。私たちは、PSK を特異的に認識する細胞膜上の受容体タンパク質も解明しました。その遺伝子を破壊すると、植物体は形成されるものの、組織の成熟とともに細胞増殖のポテンシャルが低下し、個々の細胞の寿命も短くなります。植物特有の組織の可塑性と何らかのリンクがある可能性があります。

翻訳後修飾は、エネルギー的には高いコストがかかります。そうまでして細胞外に分泌されてい

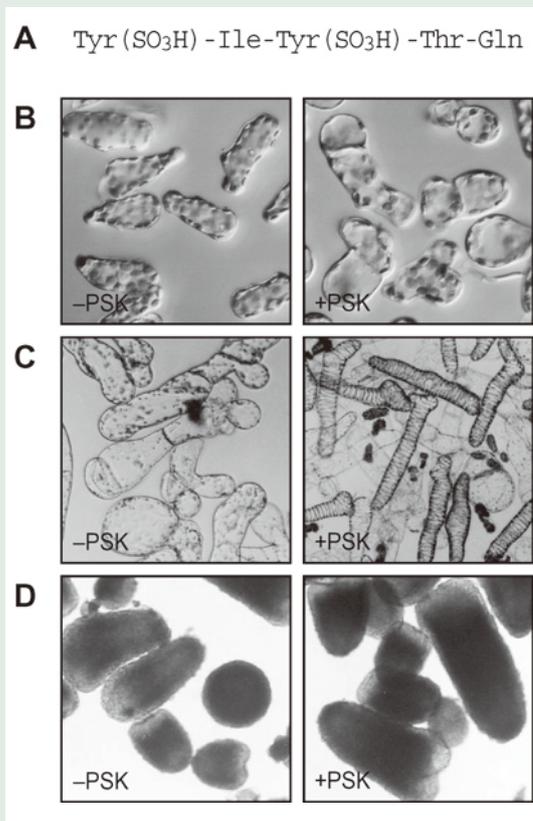


図1 : (A) PSK の構造。(B) 10 nM の PSK による葉肉細胞の増殖促進効果。(C) PSK による葉肉細胞の仮道管分化促進効果。(D) PSK による不定胚形成促進効果。

自動車制御システムのリアルタイム性解析

高田 広章 大学院情報科学研究科教授

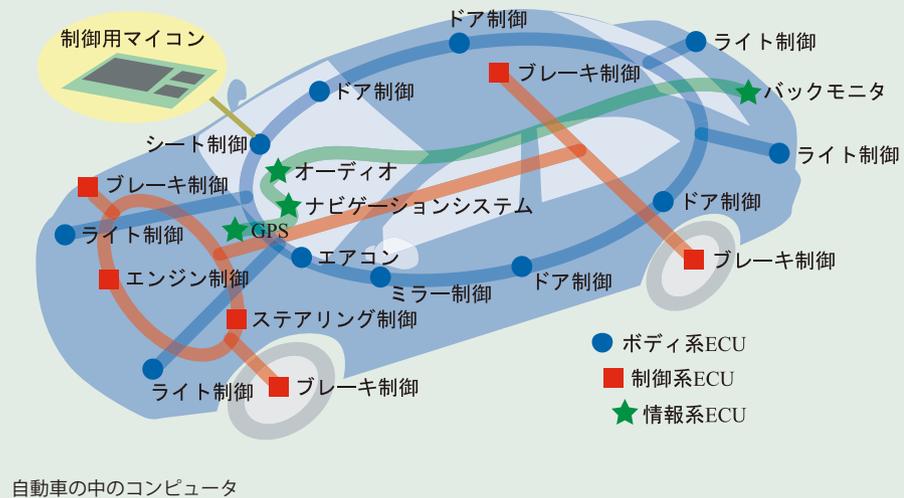
私たちの身の回りの多くの機器にコンピュータが使われていることはご存じと思いますが、自動車はその典型的な例であり、多いものでは1台の自動車の中に100個を超えるコンピュータが使われています。このように、各種の機械や機器の中に組み込まれて、それを制御するコンピュータシステムのことを、組み込みシステムと呼びます。

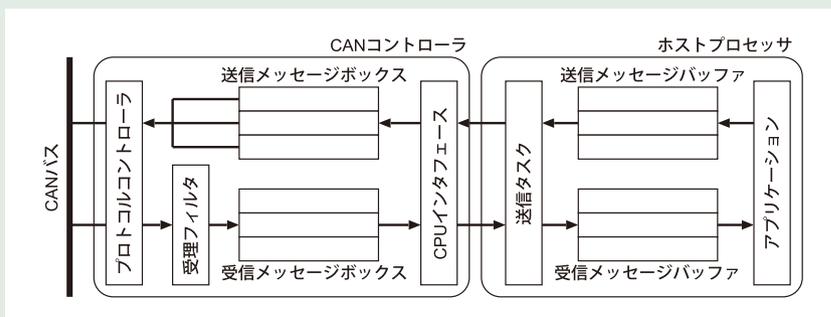
組み込みシステムは、機械を制御するという役割上、決められた時間内に結果を出さなければならないという性質（これをリアルタイム性と呼びます）があります。特に自動車の制御システムのように、システムの動作遅れが重大な事故につながる恐れがある場合には、システムのリアルタイム性を何らかの方法で保証しなければなりません。

私達の研究室では、自動車の制御システムを題

材として、組み込みシステムのリアルタイム性を保証するための理論や手法の研究に取り組んでいます。ここでは、最近の成果の中から、自動車内のネットワークシステムのリアルタイム性検証手法について紹介します。

自動車向けに広く使われているネットワークに、CAN（コントローラー エリア ネットワーク）と呼ばれるものがあります。CANにおいては、バス上に接続された複数のコンピュータが同時にメッセージを送信しようとした場合、メッセージに付与された優先度が高い順に転送が行われます。そのため、あるメッセージを送信しようとしてから、その転送が終わって送信先に届くまでにかかる時間は、同時に送信される他のメッセージに依存します。





CANノードの通信モデル

CANの一般的な使い方では、各メッセージは周期的（例えば、10ミリ秒毎）に送信されます。この場合には、他のメッセージの影響をすべて見積もって、あるメッセージの転送にかかる最大時間を求めることができますが、この求め方は状況によって変わってきます。

最も単純な状況では、着目するメッセージを送信しようとすると同時に、それよりも優先度の高いすべてのメッセージが送信されようとした場合、この時間が最大になることが数学的に示されています。しかし実際のシステムでは、ネットワークコントローラ（ネットワークを制御する電子部品）上に送信すべきメッセージを記憶しておく数に制限があり、優先度の低いメッセージが優先度の高いメッセージの邪魔をする優先度逆転と呼ばれる現象が起こります。

私達は、この優先度逆転の影響を正確に見積もって、メッセージの転送にかかる最大時間を求める手法を示すとともに、優先度逆転の影響を小さくして、最大時間を短縮する手法を提案しました。

メッセージ転送の最大時間を正確に求められるようになると、自動車内のネットワークシステムに、リアルタイム性の保証が得られます。また、最大時間を短縮することで、不必要に高速なネットワークを用いる必要がなくなります。つまり、自動車の信頼性の向上とコストダウンにつながるわけです。

近年、自動車の例に典型的に見られるように、組込みシステムが急速に複雑化しており、その信頼性確保が、産業界において大きな課題となっています。信頼性を向上させる各種の手法は、産業界からの要求の高いテーマとなっています。大学院情報科学研究科では、このような産業界からの要求にこたえるために、この4月に附属組込みシステム研究センターを設置しました。このセンターでは、産学連携による組込みシステム技術の研究開発に取り組んでいく計画です。

最後に、本稿で紹介した研究成果の多くは、トヨタ自動車との共同研究によるものです。共同研究に参加した皆様に感謝したいと思います。

1986年東京大学理学部卒業、1988年東京大学大学院理学系研究科修士課程修了、1989年東京大学理学部教務職員、1993年同助手、1996年博士（理学）、1997年豊橋技術科学大学工学部講師、2001年同助教授、2003年名古屋大学大学院情報科学研究科教授。2006年より同研究科附属組込みシステム研究センター長を兼任。組込みシステム向けのオープンソースソフトウェアを開発するTOPPERSプロジェクトを立ち上げ、その会長を務めるなど、産学官連携による組込みシステム技術の研究開発に尽力。

たかた ひろあき



宇宙とはなにものなのか：最新の宇宙像

松原 隆彦 大学院理学研究科助教授／高等研究院教員

私たちの住んでいるこの大宇宙とはいったいなにものなのでしょう？どこから来て、どこへ行くのでしょうか？人類の抱く疑問の中でもこれほど原始的で根源的なものは少ないでしょう。あまりにも大きな問題すぎて、はたして答えがあるのかと思われるかもしれません。しかし、最近の科学技術の進歩に支えられてこのような問題にも科学のメスが入るようになり、私たちは物理学の手法でこの問題に取り組んでいます。この十年あまりの宇宙論の研究により、これまであいまいな描像しか得られていなかった宇宙の姿や進化について、観測に裏打ちされた定量的な理解が大きく進展しました。

このような宇宙論研究の進展をもたらしたものは、宇宙をできるだけ広く、また、できるだけ遠くまで、あらゆる手段を使って「見る」ということです。宇宙を広く見ることで宇宙の全体の構造が見えてきます。また、光の速度は有限ですので、遠くの宇宙からやってくる光は大昔の宇宙の姿を

見せてくれます。このようにして、宇宙全体の姿や進化が調べられています。現在の宇宙はビッグバンという大爆発によって始まり、現在もどんどん膨張していることが明らかになっています。

宇宙の姿や進化を明らかにした最新の研究の中でも、とくに代表的なものとして、「宇宙背景放射ゆらぎの観測」、「遠方超新星の観測」、そして、「宇宙大規模構造の観測」が挙げられます。はじめの宇宙背景放射とは、いまから137億年あまり前、宇宙が始まってまもないころに放射された光のことです。最近では、WMAP (Wilkinson Microwave Anisotropy Probe) という衛星によりこの光の詳細な地図が描かれています(図1)。この地図を分析すると、宇宙の初期の姿が明らかになります。また遠方超新星とは、数億年から数十億年前に存在した一連の星で、突然明るくなってすぐに暗くなってしまうという性質があります。ある種の超新星は明るさがほぼ一定であることからその星までの距離を見積もることができま

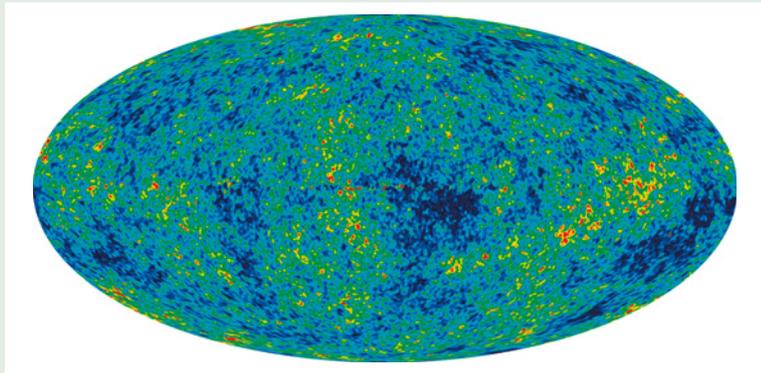


図1：宇宙背景放射のゆらぎの地図。137億年前の宇宙からやってくる光で見た、当時の宇宙の温度のわずかな変化を表している。(NASA/WMAP Science Team 提供)

す。つまり宇宙の「ものさし」として機能して、時空間の性質を調べることができます。最後に宇宙大規模構造とは、比較的最近の宇宙の全体構造のことで、これは宇宙に点在する銀河の位置を大量に観測して調べます。筆者の参加している史上最大の大規模構造観測プロジェクトである SDSS (Sloan Digital Sky Survey) により、これまでにない範囲の大規模構造が明らかになっています(図2)。この構造を分析すると、宇宙の全体構造がどうできてきたのかを調べることができます。

このような画期的な宇宙観測の結果、宇宙の姿について驚くべきことが次々と明らかになっています。最も驚くべきことのひとつは、この宇宙のほとんどは、我々がよく知っている物質以外のものによって構成されている、ということでしょう。それは宇宙のダーク成分と呼ばれるもので、光を出したり反射したりという相互作用が全くありません。そのため地球上では見つからなかったのですが、精密な宇宙観測によってはじめて見つかりました。ダーク成分には少なくとも2種類あります。一つはダークマターと呼ばれるもので、通常の元素周期表にはあてはまらない、未知の物質でできています。もう一つはダークエネルギーというもので、これはもはや物質という性質では表せないような未知のエネルギーです。これらの正体はまだ全くわかっていませんが、少なくともこれらのダーク成分がないと宇宙の姿や進化が説明できないのです。逆にこれら2種類のダーク成分を仮定すると、さまざまな観測結果がきれいに説明できるようになります。宇宙全体の成分比も現在正確に見積もられ、通常物質は約5%、ダークマターは約23%、ダークエネルギーは約72%となっています。ダークエネルギーは宇宙が将来ど

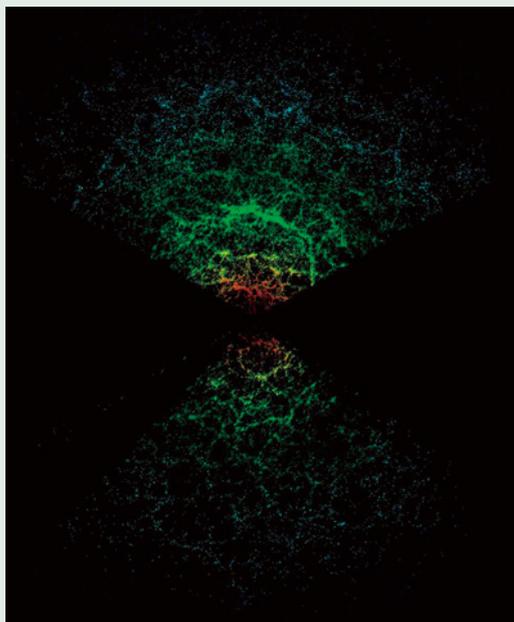
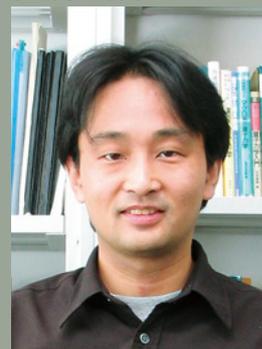


図2：宇宙の大規模構造。細かな点ひとつひとつが銀河の位置を表し、我々の銀河は中心に位置している。(Sloan Digital Sky Survey Team 提供)

うなるかという進化の鍵を握っています。比較的単純なモデルに基づく、宇宙の膨張はだんだんと速くなる「加速宇宙」として進化し、永遠に膨張を続けると計算されます。しかし、それはまだひとつの可能性であって、より確実なことを言うためには、ダークエネルギーをより詳細に調べることが必要です。また、ダークエネルギーは既存の物理学にとっても特異な存在で、その正体はこの世界の存在基盤にもかかわる意味をもっています。今後の宇宙論研究にとっては重要な課題で、我々も現在精力的に研究に取り組んでいるところです。

1990年京都大学理学部卒業。1995年広島大学大学院理学研究科修了。博士(理学)。日本学術振興会特別研究員、東京大学大学院理学系研究科助手、ジョンスホプキンス大学物理天文学科研究員を経て、2000年より名古屋大学大学院理学研究科助教授。2004年より名古屋大学高等研究院流動教員(現呼称:教員)。専門領域は宇宙論、宇宙の構造形成、宇宙大規模構造、統計的宇宙論など。

まつばら たかひこ



楽しく学ぶ ―身近なものに目を向ける―

伊藤 秀郎 医学部保健学科教授／検査技術科学専攻主任

私は、平成17年度後期に共通教育科目の一つである理系・生物学実験を担当しました。幸か不幸か学生の授業アンケート調査で好評を博し、グッドプラクティス報告にも選定されました。ここでは生物学実験内容の紹介と実験を通して何が得られたかを考察してみました。

〈はじめに〉

この生物学実験は大幸キャンパスで開講されている関係で、例年受講定員40名のほとんどが保健学科（看護学、放射線技術科学、検査技術科学、理学療法学、作業療法学の各専攻）の学生であることから実験テーマは「誰もが興味をもてるもの」、「理屈抜きで話し合えるもの」などを勘案して「私たちの身の回りの細菌について」に設定しました。すなわち地球上には無数の微生物が存在しています。また人体には約100兆個もの細菌が常在していることの一部を肌で感じ取ってもらうことと将来医療従事者として肉眼では見ることができない細菌にどのように対処したらよいかを考える機会にしました。

〈実験内容〉

1. 空中落下細菌の培養（図1）
2. 消毒前・後の自分の手指の細菌の培養（図2）
3. 自分の鼻腔内細菌の培養
4. 河川の水、風呂の残り湯などの培養

一夜培養した培地上のコロニーをカウントしたり、グラム染色標本を作り顕微鏡にて観察しました。1グループ5人とし、指導スタッフは教授1、助手2、TA 5（必要な時間帯のみ）を配置しオリジナルの「実験手引書」を用いて、実験そのものが学生自身で十分行えるまでに指導しました。また、机間指導（学生との対話）などその場その場での教授にも力を入れました。「実験は分かり易く、実験結果の検討は奥深いもの」という点を中心にしました。



図1. 空中落下細菌の培養結果

〈所感〉

学生の感想

- ・初めて細菌を培養し、染色標本を顕微鏡で観察したときは感激しました。
- ・空中落下細菌の培養結果から人が大勢いる環境には細菌が多くいることが分かりました。反対に人気のない部屋では少ないようでした。
- ・手指の細菌検査で、消毒前と消毒後の結果に差がなく手洗い効果が出ていなく、時間をかけてしっかり手洗いしないといけないことが分かりました。



図2. 手指の細菌の培養結果

- ・自宅の風呂の残り湯を培養したところ沢山の細菌が検出され驚きました。
- ・自分の鼻腔には黄色ブドウ球菌がいたのでちょっと心配です。
- ・将来病院で働く自分としては「手洗い・消毒」の重要性がよく分かりました。
- ・とても楽しい実験でしたのでもう少し長く実験したかった。

教員の対応

- ・実験項目ごとにレポートを提出してもらい、学生によっては培養結果に一喜一憂する者もいたので、「常在菌」であり心配無用と丁寧に説明しました。
- ・医療の原点は「手洗いに始まり手洗いに終わる」と言われています。この実験を契機に日常生活においても「手洗いの励行」を呼びかけました。
- ・実験前と後では学生の細菌に対する考え方に変化が見受けられました。

実験準備にはかなり時間を割き、双方向性の実験を目指し机間指導に力点を置きました。結果として受講生から相応の評価が得られたと思っています。

1944年生れ。名古屋大学医学部附属病院技官、医療技術短期大学部助手、講師、助教授、医学部保健学科助教授を経て、2000年4月から現職。専門は病原微生物学。
趣味：稲作、野菜作り、神社仏閣巡り。

いとう ひでお



材料電磁プロセッシングの世界拠点の構築

浅井 滋生 大学院工学研究科教授

この度、「材料電磁プロセッシングの世界拠点の構築」というプログラムが平成18年度アジア研究教育拠点事業に採択されました。この事業は、アジア諸国の研究教育拠点機関と持続的な協力関係を確立し、世界的水準の研究拠点を構築するとともに、次世代の中核を担う若手研究者の養成を目的として、日本学術振興会が平成17年度より実施しているものです。18年度は全国から47件の応募があり、3件が採択されましたが、その内の一つに入れていただきました。

「材料電磁プロセッシング」とは、工学系の人間にとっても聞き慣れない言葉と思われる方が多いと思います。これは電場・磁場の機能を活用して、新しい機能を持つ材料を創製することを目的とした新しい科学・技術分野で、名古屋大学を起点として1980年代に誕生し、我が国の材料関係の学協会の庇護の下、フランスのグルノーブル大学との

強力な連携・協力があって今日に至ったものです。ここ20年間の歩みを図1に纏めてみました。

1994年、名古屋大学で「第1回材料電磁プロセッシングシンポジウム」を開催するにあたり、この言葉を「Electromagnetic Processing of Materials」と訳してみました。今日、この単語をGoogleで検索しますと11,400件のヒット数に上りますので、ここ12年間で、かなり世界に流布されたことになります。特に、近年、超伝導技術の著しい発展に伴って強磁場が比較的容易に得られる環境が整い、この強磁場を用いることにより、磁性材料に限られていた磁化力（磁石が鉄を引きつける力として馴染み深い）の機能を非磁性材料にも拡張することが可能（木、プラスチック、ガラス等も磁場によって駆動可能）となり、この分野は「強磁場の材料科学」として注目を集めるようになっていきます（詳しくはホームページ

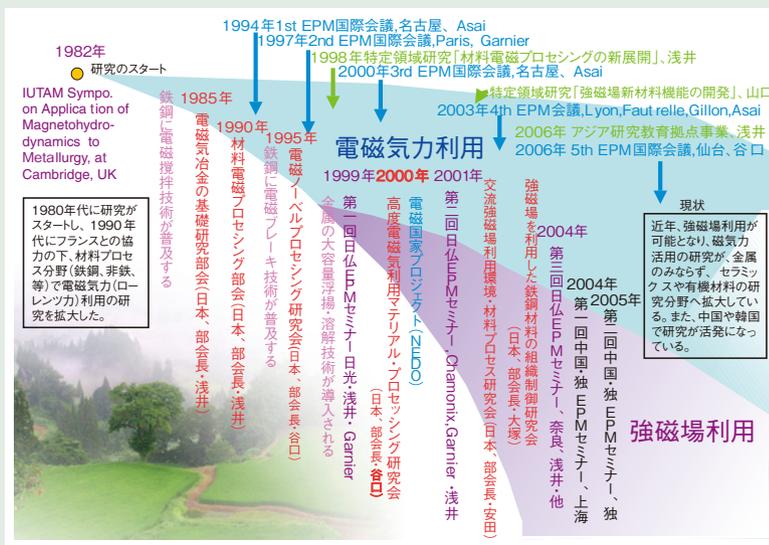


図1 材料電磁プロセッシング(Electromagnetic Processing of Materials)の発展の経緯

<http://www.numse.nagoya-u.ac.jp/PI/> をご覧ください。

本プログラムは図2に示すように交流目標を掲げており、日本、中国、韓国の連携・協力の下に進めます。構成としては、日本側は6大学、1研究所で、主幹校は名古屋大学、中国側は東北大学を主幹校とする4大学で、その代表者は名古屋大学フェローの赫翼成学長です。韓国側は2大学、2研究所で、その代表者も赫氏同様、本学で「材料電磁プロセッシング」を学んだ卒業生です。交流目標として(1)世界に於ける「材料電磁プロセッシング」の牽引、(2)次世代を担う若手研究者の育成を掲げており、国を跨ぐ4研究を推進すると共に、ここに掲げる5つの若手研究者育成事業を、オープンクラスター制度(21世紀COEプログラム「自然に学ぶ材料プロセッシング」で開発した若手研究者活性化)をフルに活用して推進して

いくつもりです。

これまで、「材料電磁プロセッシング」の分野は日本とフランスが世界の牽引役を務めてきましたが、近年、中国、韓国の経済発展に伴い、“ものづくり”の拠点が欧米から東アジア(日本、中国、韓国)に移行しております。このような状況を踏まえて、これまでの日本—ヨーロッパの交流重点を日本—中国・韓国に移し、「強磁場の材料科学」を包含した「材料電磁プロセッシング」の学術・技術の再構築と次世代を担う若手研究者の育成を図ることを目的に、名古屋大学に本分野の世界的研究教育拠点を形成しようと考えております。学内の皆様におかれては、温かいご支援をお願いする次第です。

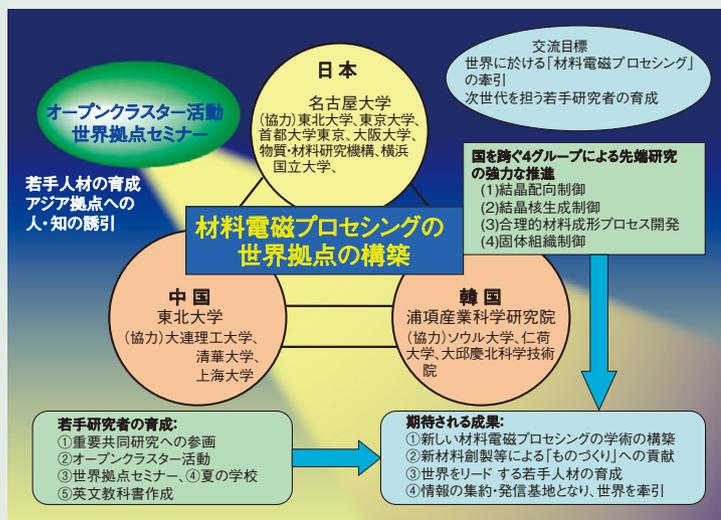


図2 研究教育交流計画の概要

1966年3月 名古屋大学工学部鉄鋼工学科卒業
 1971年3月 名古屋大学大学院工学研究科博士課程鉄鋼工学専攻 満了退学、工学博士
 1971年4月 名古屋大学工学部助手
 1979年9月 名古屋大学工学部助教授
 1988年4月 名古屋大学工学部教授、現在に至る。
 専門分野: 材料工学
 趣味: テニス(名大テニス部長)、川柳(コートでは 仕事で見せぬ エース打ち)
 好きな言葉: 高くこゝろをさとりて俗に帰るべし(松尾芭蕉)

あさい しげお



12. こすもす保育園



- 1 外観西南面
- 2 園庭
- 3 保育室
- 4 テラス
- 5 厨房
- 6 廊下



平成18年3月、「名古屋大学こすもす保育園」が完成しました。

「こすもす保育園」は、教職員の福利厚生充実・国際交流推進・学生サービス向上を包含した名古屋大学の「男女共同参画推進事業」の1つとして建設されました。

建物は、木造（集成材工法）平屋建て、延べ234.79㎡で、保育定員は30名（常時保育時26名、一時保育時4名）を予定しています。

名古屋大学は、法人化により雇用保険の適用事業主団体となったため、保育園の設置に対し、財団法人21世紀職業財団より設置費・運営費・保育遊具等購入費の一部を助成する制度を受けられることになりました。これにより、大学の負担を軽減しながら、子どもたちのために最適の施設を新しく設置したいという希望を実現することができました。

設置場所の選定に当たり、学内各所の候補地を検討した結果、現在の場所を選定しました。緑あふれる自然環境に恵まれた場所であり、安全性の面においても交通量の多い市道と隣接することなく騒音や排気ガスなど不利な点が少ないことが選定の理由です。しかし、この場所は自然林の中であり、名古屋市風致地区にも指定されていることから、樹木を伐採して建物を設置することに対して学内からさまざまな意見が出されました。そのため、建物配置や周辺環境整備等について検討し、伐採樹木を最小限に留めるために樹木の比較的小さい位置に建物を配置することや、園庭内にも自然の樹木を残すこととしました。建物の性格上、自然環境に恵まれたこの場所が保育園に最もふさわしい場所であるとして理解を得ることが出来ました。

設計に当たっては、暖かみのある建物とするた



め木造を希望する声が関係者の中に多かったため、木造を中心とした各種工法を、基本性能とコストの面から検討しました。その際、平嶋義彦生命農学研究科教授のご助言をいただき、建物の主要な構造部材に集成材を使用し、構造計算により地震などの自然災害に対する建物の安全性を確保する工法（SE 構法）を採用することとしました。

SE 構法は、木のやすらぎと鉄骨の強さを併せ持つ木骨ラーメン構造です。今までの在来工法の木造では不可能だった、大空間や大開口を実現することができ、本保育園では高い天井と自然光が十分に差し込む南向きの大きな窓を持つ保育室を造ることができました。

保育室は全部で3室あります。保育室1は面積が約60㎡あり、その一部は8台のベビーベッドが設置されています。保育室2と保育室3はそれぞれ約25㎡あり、可動間仕切りを開けることにより一部屋とすることができ、大部屋での使用も可能となっています。子どもの年齢に対応した保育室の設置を前提としながら、フレキシブルな使い方ができるようになっています。保育室の3室は全て床暖房を採用していますので、冬は足もとから自然な暖かさの中で過ごすことができ、また、外部には保育室から連続したデッキテラスを設けていますので広がりのある育児スペースを創出することができます。南側のテラスは普段の外部への出入りをする場所でもあり、十分な幅と広さを確保して、雨の日でも使いやすいようにしました。テラスの屋根の一部はガラス張りになっており、冬場には太陽の光が差し込んで、室内でひなたぼっこができ、省エネにも役立ちます。仕上げ材の選定に当たっては、木のぬくもりが感じられるとともに、清掃しやすいなどの機能面、シックハウ

ス対応などの性能面、さらにコスト面も考慮し、手の届く範囲の床、壁、デッキテラスには木質系の材料を使用しました。高価な材料を使わずとも、安全で安心な空間とするよう心がけ、自宅にいるような安らぎを感じられるようにしました。

保育室の他には、厨房・沐浴室・休養室・事務室・更衣室・便所があります。厨房は防火対策のため、オール電化仕様の厨房機器を採用していますので、掃除がしやすく清潔かつ安全です。また、モニター付ドアホンを併用した電気錠付門扉やフェンスセンサーにより、不審者の侵入を未然に防ぐことが出来ます。さらに、ネットワークカメラを建物内外5か所に設置し、子どもの安全を見守るための手助けが出来るようにしました。このネットワークカメラは、保護者がインターネットを通じて園内の状況を見ることも可能です。

建築的には、名古屋市立保育園の仕様を参考に、扉の指詰め防止や、押し棒錠による施錠、段差のない床などの安全対策を行いました。

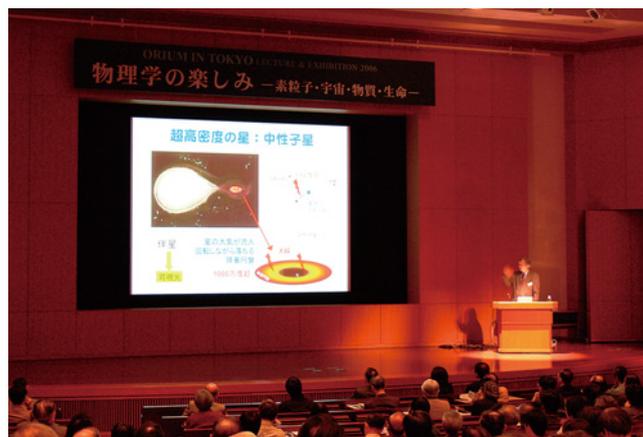
「こすもす保育園」の名称は、学内公募により、周藤芳幸文学研究科教授の案が採用されました。親しみやすい花の名前であると同時に、周知のようにギリシャ語で「世界、宇宙」を意味する語であり、この保育所で成長する子どもたちが、名大というマイクロコスモスから世界というマクロコスモスへと羽ばたくことができるように、また、個人というマイクロコスモスと社会というマクロコスモスとの間でバランスのとれた人格を形成することができるようにとの思いを込めて命名されたものです。

(施設管理部)



名大物理 COE が東京で公開講演会を開催

物理学の楽しみー素粒子・宇宙・物質・生命



21世紀 COE プログラム「宇宙と物質の起源：宇宙の物理的解説」(ORIUMU、拠点リーダー福井康雄理学研究科教授)は、連休初日の4月29日(土)、東京一橋記念講堂において、第二回東京講演会「物理学の楽しみー素粒子・宇宙・物質・生命」を開催しました。

これは、同プログラムを推進する研究者が、日頃の研究成果を、一般、学生、卒業生の方々に、分かりやすく伝える講演会であり、昨年同日に続き、2回目となります。

今回は、日本学術振興会研究事業部長の大木幸子氏(大木幸子)を迎え、300名を越す参加者を得て行われました。最初は拠点リーダーの福井教授から、同プロジェクトの夢と、最近の成果の紹介があり、続いて大木研究事業部長から、更なる発展へ向けて、励ましの言葉を頂きました。

午前11時から昼食をはさんで午後3時30分まで、物理学の4つの分野(宇宙、素粒子、物性、生物)の研究者が、30分ずつ講演を行いました。これは、もっとしっかり話を聞きたい、もっと質問時間が欲しいと言う、昨年度の要望を受け、午後だけでなく午前から開始することにしたものです。國枝秀世同研究科教授は、「宇宙は極限の実

験室」と題して、地上では実現できない、超高温、高圧、希薄な宇宙の姿を話しました。中村光廣同研究科助教授は、「素粒子実験：顕微鏡で探るダークな宇宙」という題名で、フィルム乾板に写るミクロな軌跡や、ニュートリノから、宇宙の暗黒物質まで、未知の粒子を探る話をしました。佐藤正俊同研究科教授は、「物質科学への招待」と題し、超伝導物質が如何に見いだされ、更に高温で実現されるようになってきたか、原理も合わせて話しました。最後は、岡本祐幸同研究科教授による、「計算機の物理実験室：生命現象を追って」と題する、生命現象を如何に計算機で再現するか、という内容の講演でした。これらの講演の後には15分ずつ質問時間が取られ、参加者からは、講演者の思わぬ質問も飛び出し、熱心な質疑が行われました。

午後からは、この講演会と平行して、26の研究室のブースで、研究展示会が行われました。ポスドク、若手研究者が中心に説明を行い、参加者から直接、質問を受ける形で進められました。講演会では聞きにくいこと、日頃から思っていた疑問、また卒業生からは出身研究室の現状など、さまざまな議論が午後5時半の終了時刻まで、時間一杯続きました。また展示会場では、来年度入学者を対象とした大学院入試説明会も行われ、20名近い関東地区の大学生が参加し、詳しい説明を受けました。

参加者のアンケートからは、大変面白かった、是非今後も東京で続けて欲しいなどの声が、多数寄せられました。



文学部60周年に向け記念の植樹

文学部・文学研究科同窓会は、4月21日（金）、同研究科棟南側中庭に、あおぎりを10本植樹しました。

これは、今年3月4日（土）に開催された同窓会総会において、来たる文学部60周年に向けて、記念として植樹をすることが決定されたもので、杉山理事、町田文学研究科長、同窓会代表者等が出席して植樹式が行われました。

あおぎりは、名古屋城跡に本学キャンパスがあった頃、旧兵舎を改造した文学部棟の前に数本植わっていた木で、いつの頃からか文学部生のシンボルとなりました。



植樹式の記念撮影

地球水循環研究センターがユネスコ IHP 研修コースを実施

地球水循環研究センターは、2月26日（日）から3月11日（土）の2週間にわたり、ユネスコ国際水文学計画短期研修事業（IHP 研修コース）の第15回目を実施しました。

今回は「陸域生態系における水循環と炭素循環」と題し、同センターを主会場に、東京大学大学院農学生命科学研究科附属愛知演習林、筑波大学陸域環境研究センター、千葉

大学環境リモートセンシング研究センター、海洋研究開発機構・横浜研究所（地球シミュレータセンター）での講義と見学会を行いました。今回の特徴としては、本学21世紀COEプログラム「太陽・地球・生命圏相互作用系の変動学（SELIS）」の国際スクールと共催する形を取ったことが挙げられます。参加した研修生は、ユネスコによる7名の派遣研修生、SELISから旅費をサポートして招聘した6名、そして本学環境学研究科の博士課程後期課程（留学生特別コース）に在籍している1名を加えた計14名で、全員が意欲旺盛でした。

本研修コースは、講義を10テーマ、演習を3テーマ、施設見学を4ヶ所で構成しました。学内から講師を5名、学外から5名お願いし、当該研究分野における我が国の最新の研究動向を紹介しながら、陸域生態系に関係した水循環や炭素循環の重要性について講義と演習を実施しました。

研修生の反応は非常に良く、今後も機会があれば、今回のような研修コースに参加したいと強く希望していました。講師陣をはじめ、上記各研究教育機関、文部科学省、そしてUNESCO-IHP事務局の方々に感謝申し上げます。



修了証書授与式の記念撮影

公開シンポジウム「流域で見る洪水ハザード」を開催

●大学院環境学研究科

公開シンポジウム「流域で見る洪水ハザード」が、4月15日（土）、環境総合館レクチャーホールにおいて、一般市民など約110名の参加を得て、開催されました。

このシンポジウムは、大学院環境学研究科地理学講座内の災害・防災学習カリキュラム開発委員会が主催したもので、本委員会は、主に水害に対する地域防災力の向上をめざして、行政・市民団体と協力しながら、市民向けの防災学習カリキュラムの開発を行っています。平成16年度から



ロビーに展示されたハザードマップを見る来場者

は、文部科学省生涯学習政策局や河川環境管理財団から助成を受け、天白川を対象に調査・研究を行っています。

シンポジウムでは、岡本耕平環境学研究科教授による趣旨説明の後、中村太士北海道大学教授による「河川環境を流域の視点から考える」、松尾直規中部大学教授による「洪水ハザードマップの作成方法」と題する2つの講演が行われました。その後、廣内大助愛知工業大学地域防災研究センター研究員が天白川流域住民へのアンケート調査結果について報告しました。このアンケートは、災害・防災学習カリキュラム開発委員会が、名古屋市と日進市の天白川流域住民に対して実施したもので、約6,500世帯から回答がありました。特に日進市民向けのアンケートでは、ハザードマップに記載すべき情報について尋ねており、同市洪水ハザードマップにはこの調査結果が生かされています。会場では、印刷されたばかりのハザードマップが配布され、日進市防災安全課長の鈴木正敏氏が作成過程を説明しました。最後に、大西宏治富山大学助教授の司会でパネルディスカッションが行われ、パネリストとして、岡本、中村、松尾教授、鈴木氏に、市民団体「市民がつくる災害に強いまちづくりの集い」の谷川 修氏、愛知県河川課の向井克之氏が加わり、参加者からの意見・質問票をもとに議論を行いました。

留学生に向けた地震防災対策

●留学生センター

留学生センターでは、留学生の生活支援の一環として10年以上にわたって地震防災対策セミナーやワークショップを開催しています。災害対策室が設置されてからは専門的な支援も得られるようになり、多文化環境を意識した防災体制作りが、大学で始まっています。

1995年の阪神大震災での経験では、外国籍住民が犠牲になる割合が他の住民よりも高く、言語・文化の壁は情報弱者そして災害弱者を生みやすいことが知られています（この時の留学生たちの様子は、地震の3ヶ月後の留学生56人の手記をまとめて出版された『忘れられない…あの日～神戸からの声』（留学生震災文集委員会）で詳しく知ることができます。).

本学に在籍する約1,200名の留学生は、地震多発地域から来て訓練を受けている人、地震のイメージさえ持たない人など様々で、留学生向け防災対策といっても様々ではありません。4月10日（月）に行われた、研究協力・国際部国際課による新入留学生オリエンテーションでは、災害対策室作成の地震防災ガイド（日本語版・英語版）を配布し、大地震への日頃の準備と、いざという時の心得を伝えました。また、5月30日（火）に開催された留学生のためのセミナーでは、センターと災害対策室が協力してワークショップを行い、映像やクイズを用いながら、地震についての想像力を鍛える催しを行いました。

いつ起こってもおかしくない大地震に備え、本学の構成員皆が「人事を尽くして天命を待つ」の気持ちになれる体制制作りのために、大学全体の連携が急務となっています。

全学技術センター装置開発系に感謝状贈呈

全学技術センター教育・研究技術支援室装置開発技術系は、独立行政法人宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究本部から、感謝状と記念品を贈呈されました。これは、X線観測衛星すざく搭載機器の開発に協力した同センターの高い技術力とX線天文学の推進に対する大きな貢献に対し、



装置開発系第一装置開発グループのスタッフと國枝秀世理学研究科教授、田原 譲エコトピア科学研究所教授

贈られたものです。

大学院理学研究科宇宙物理学研究室では、X線天文衛星に搭載するX線望遠鏡の開発を、NASAゴダード研究所と共に進めて来ました。その反射鏡製作のため、全学技術センター教育研究支援室装置開発系の技術職員を中心に、研究者、加工業者と共に開発した母型加工技術は、すざく搭載反射鏡製作に用いられました。これらの技術は、後の本学及び宇宙科学研究所におけるX線望遠鏡開発で、なくてはならない技術として利用されています。

平成17年7月10日に宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究本部が打上げたAstro-E 2衛星「すざく」では、本学で開発に携わったX線望遠鏡が主検出システムとして使用され、日々の観測に、使われています（X線観測衛星すざくについては、トピックス150号「知の先端」で紹介しています。）。

博物館野外観察園の見学会を開催

博物館は、5月20日（土）、野外観察園の見学会を開催しました。本園は、東山キャンパスの南西にある緑地で、今春より一般公開しています。今回の見学会は、観察園をより深く知ってもらうこと、また、観察園の植物をいつもとは違うミクロの目で覗いてもらうことを目的に開かれ、午前・午後の部、合わせて47名の参加がありました。



野外観察園で説明に聞き入る参加者

当日は、前夜まで降っていた雨も上がり、午後にはさわやかな青空が覗くほどの好天気になりました。折しも園はキシウブ、ウツギやハッサクなどの花ざかりです。見学者は、園に生えている珍しい植物の説明を聞いたり、いつもは研究用で立ち入れない場所に入り、ミカワタヌキモやハッチョウトンボなどの観察を行いました。検索表を使った植物の名前当てにも挑戦し、図鑑で見る用語を実際の植物から学びました。草と木の違いや葉の形の説明に、熱心にメモを取る見学者も見られました。

園の見学が終わると博物館に戻り、今見てきた植物のミクロの姿を走査型電子顕微鏡で観察しました。見学者は、電子顕微鏡の仕組みや観察の手順などについて説明を受け、自分達で準備した花粉などを実際に観察しました。先ほど観察園から採ってきた花の花粉が、目の前で何千倍もに拡大されるのを見て、初めは信じられないという表情の参加者もいました。しかし、説明などを聞くにつれ、様々な質問も飛び交うようになり、多くの見学者が、次々と映し出される植物のミクロの世界に、時を忘れて熱心に見入っていました。

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成18年4月16日～5月15日]

| 記事 | 月日 | 新聞等名 |
|--|----------------------------------|--------------------|
| 1 ほとけたちのイメージを探る：宮治昭・文学研究科教授 バーミヤンの2大仏 雄大なスケールで圧倒 | 4.16 (日) | 中日 (朝刊) |
| 2 この人：警視庁の科学警察研究所長に就任した勝又義直・本学名誉教授 | 4.16 (日) | 中日 (朝刊) |
| 3 岐阜県はカワウの卵に石けん水をかけ孵化抑制へ：佐藤孝二・本学名誉教授コメント「環境への影響は少ない方法だと思うが、卵の孵化を抑えることでどれだけ効果があるか、また、カワウの生息数を極端に減らさないか、検証することが重要だ」 | 4.17 (月) | 読売 |
| 4 社会教育団体「名古屋市西倫理法人会」主催の園遊会に本学の留学生ら3人が招待され、茶道を体験 コーチャル・リトゥさん・本学大学院生は「緑に囲まれた茶室にしていると気持ちが落ち着く」と話す | 4.17 (月) | 読売 |
| 5 中部の医療：くすり 医学部附属病院薬剤部では6年前から全国に先駆け、「ワーファリン教室」を開催 患者と薬剤師のマンツーマンで食べ合わせの指導をする | 4.17 (月) | 読売 |
| 6 文部科学省は2006年度科学技術分野の文部科学大臣表彰の受賞者を決定 科学技術賞に、近藤孝男・理学研究科教授らによる「シアノバクテリアの生物時計の分子メカニズム」、齋藤弥八・工学研究科教授らによる「カーボンナノチューブ電子源とディスプレイへの利用の研究」など90件、279人を表彰 | 4.17 (月) | 日刊工業 |
| 7 理化学研究所と鍋島俊隆・医学部附属病院教授らのチームは、初の躁うつ病モデルのマウスを開発 ミトコンドリアの機能が脳内で異常になるよう遺伝子操作したマウスが躁うつ病に似た症状を示す | 4.18 (火) 4.25 (火) | 日刊工業 他4社 |
| 8 文部科学省は21世紀COEプログラムで採択した研究に対する2006年度の補助金額を決定 本学の交付額は計17億700万円 | 4.18 (火) | 中日 (朝刊) |
| 9 新エネルギー・産業技術総合開発機構は2006年度の第1回大学発事業創出実用化研究開発事業として、本学の「コントロールドリリング用ジャイロ内蔵型孔軸方向測定装置の開発」など26件の助成事業を決定 | 4.18 (火) | 日刊工業 |
| 10 総務省は2006年度の「戦略的情報通信研究開発推進制度」の新規採用研究課題に、河口信夫・工学研究科助教授らの「異種スマート環境間をセキュアに動的接続・構成する基盤技術」、谷本正幸・工学研究科教授らの「自由視点映像伝送方式に関する国際標準技術の研究」など43件を採択 | 4.18 (火) | 中日 (朝刊) |
| 11 病を知る スポーツの傷病・突き指：平田仁・医学系研究科教授 | 4.18 (火) | 日経 (夕刊) |
| 12 「第2回名古屋大学物理COE公開講演会」4月29日に開催 | 4.18 (火) | 中日 (夕刊) |
| 13 傍若無人な若者たちの心理を速水敏彦・教育発達科学研究科教授に聞く：繁殖する「仮想的有能感」 | 4.19 (水) | 中日 (朝刊) |
| 14 国重要文化財である名古屋城の表二之門の扉と東南隅櫓の柱に落書き：飯田喜四郎・本学名誉教授コメント「文化財への落書きを市は予定しておらず、うかつだったのではないかな」 | 4.19 (水) | 中日 (朝刊) |
| 15 あしなが学生募金事務局次長・野崎俊平さん・本学3年生が19日に中日新聞社を訪れ、22日からの一斉募金への協力を呼び掛けた | 4.20 (木) | 中日 (朝刊) |
| 16 2006年度の名古屋テレビ番組審議会委員に呂雷寧さん・本学大学院生ら8人が選出 | 4.20 (木) 4.26 (水) | 朝日 (朝刊) 中日 (夕刊) |
| 17 横田充弘・医学部教授らが遺伝子情報を元に生活習慣病になる危険性を診断する医療ベンチャー企業「セラノスティック研究所」設立 横田教授は「生活習慣病は遺伝子と習慣の両方が原因。『特にこれとこれをやめなさい』とアドバイスすることでより確かな予防ができる」と話す | 4.21 (金) | 中日 (朝刊) |
| 18 本学と国立天文台、北海道大学の研究チームは、「がが(画架)座ベータ星」の周囲を円盤状に取り巻き、惑星を生み出すもとなる「ちり」が大きく成長していることをハワイのすばる望遠鏡でとらえた | 4.21 (金) 4.22 (土) 4.24 (水) | 中日 (夕刊) 他3社 |
| 19 叙位叙勲：従四位 早川文夫・本学名誉教授 | 4.22 (土) | 中日 (朝刊) 読売 |
| 20 本学のギターマンドリンクラブと京都教育大学マンドリンクラブが5月3日に長岡京記念文化会館でジョイントコンサートを開催 | 4.22 (土) | 中日 (夕刊) |
| 21 ほとけたちのイメージを探る：宮治昭・文学研究科教授 大仏と王権 | 4.23 (日) | 中日 (朝刊) |
| 22 強化地域はいま：10日に行われた留学生オリエンテーションでは東海地震に関してのガイダンスも行われた 田中京子・留学生センター助教授は「留学生は情報弱者になりやすい。十分な対策を示したい」と話す | 4.23 (日) | 朝日 (朝刊) |
| 23 スガウエザリング技術振興財団は2006年度研究助成に、伊藤義人・工学研究科教授の「鋼橋の角部の防食性能に関する実験的研究」など3件を選定 | 4.24 (月) | 日刊工業 |
| 24 中部地域の大学で産業界との連携活性化：本学は東海地区信用金庫協会と産学連携に関する協定を締結し、共同研究や知的財産の活用などで交流する | 4.25 (火) | 日刊工業 |
| 25 高等教育研究センターが新入生の学習ガイドブック「名古屋大学新入生のためのスタディ・ティップス」を刊行し、2200人の新入生全員を対象にガイダンスで配布 | 4.25 (火) | 中日 (朝刊) |
| 26 本学フォルクローレ同好会による「森のコンサート」が岐阜県美濃加茂市蜂屋町のみのかも文化の森で開催され、約200人が演奏を楽しんだ | 4.25 (火) | 中日 (朝刊) |
| 27 松見豊・太陽地球環境研究所教授らのグループは、大気中に浮遊している微小粒子(エアロゾル)の成分をその場でリアルタイムに分析できる新たな環境計測機器を独自に開発 この計測器で黄砂を計測したところ、酸性雨の原因となる大気汚染物質を吸着していることを確認 | 4.26 (水) | 毎日 (朝刊) 他5社 |

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成18年4月16日～5月15日]

| 記事 | 年月日 | 新聞等名 |
|--|----------|----------------|
| 28 第26回猿橋賞に森郁恵・理学研究科教授が選ばれる 受賞テーマは「感覚と学習行動の遺伝学的研究」 | 4.26 (水) | 朝日 (朝刊) 他4社 |
| 29 文部科学省は27日、2006年度科学研究費補助金の配分を内定 本学の採択件数は1216件で7位 | 4.28 (金) | 日刊工業 |
| 30 科学技術振興機構は2006年度研究者情報発信活動推進モデル事業の「モデル開発」として東田和弘・博物館助手らの「岐阜県の地質を題材とした野外でのアウトリーチ活動モデルの開発」など13件を採択 | 4.28 (金) | 日刊工業 |
| 31 広がるクリニカルパス：吉田茂・医学部附属病院助教授は「情報の共有化、多様で変化する患者の状況に応じた対応により、質の高い医療の標準化やチーム医療の推進が可能」と話す | 4.28 (金) | 中日 (朝刊) |
| 32 東海地方3月の地震：林能成・環境学研究科附属地震火山・防災研究センター助手 | 4.28 (金) | 読売 |
| 33 教育基本法改正案が閣議決定される：中嶋哲彦・教育発達科学研究科教授は「新しい法案は国の主導権を強め、そのときの政権が望む教育を国会の決議なしで地方にやらせるよう定めている」と懸念 | 4.28 (金) | 中日 (夕刊) |
| 34 春の叙勲：瑞宝中綬章：清家政一郎・本学名誉教授、住友友宏・本学名誉教授、鈴木旺・本学名誉教授 瑞宝双光章：杉浦茂次・元学生部次長 瑞宝単光章：山口政江・元医学部附属病院看護部看護師長 | 4.29 (土) | 読売 他5社 |
| 35 ほとけたちのイメージを探る：宮治昭・文学研究科教授 パーミヤンの壁画はまさに日本画の源流 | 4.30 (日) | 中日 (朝刊) |
| 36 われら地球人：樋口敬二・本学名誉教授 「共育」の成果の試作化を | 4.30 (日) | 中日 (朝刊) |
| 37 備える：福和伸夫・環境学研究科教授は、「すでに建設された高層ビルでも耐震、制震の対策技術はある。費用的な問題も含め、政府も本腰で取り組むべき」と長周期地震動への対策を訴える | 5. 1 (月) | 中日 (朝刊) |
| 38 「九条の会・尾張旭」結成の集いが4月30日に開催 愛敬浩二・法学研究科教授の記念講演など | 5. 1 (月) | 朝日 (朝刊) |
| 39 東山キャンパスに今秋、ファミリーマートの出店が決定 | 5. 2 (火) | 中日 (朝刊) |
| 40 スポーツと名古屋大学：東田和弘・博物館助手 1924年に第6代全国学生横綱となった名古屋高等商業学校（現・経済学部）相撲部の稲垣登 | 5. 2 (火) | 中日 (朝刊) |
| 41 来春の新卒者就職戦線：田中宣秀・学生相談総合センター就職支援アドバイザーは、通年採用の動きが拡大していることを踏まえ、「企業の求める人材と学生の研究分野がうまくマッチすれば、いつでも採用する企業はあるし、また採用してほしい」と新卒者の就職戦線過熱に警鐘を鳴らす | 5. 2 (火) | 中日 (朝刊) |
| 42 公務員互助会に公費 見直しじわり：竹内信仁・経済学研究科教授は「自治体によって財政力などが異なり、互助会のサービスに基準を作るのは難しい。職員同士で話し合うだけでなく、透明性を高め、住民の理解を得ることが必要だ」と話す | 5. 2 (火) | 朝日 (朝刊) |
| 43 博物館で開催中の特別展「スポーツと名古屋大学 する・みる・つくる」は研究機関のイメージが強い本学の意外な一面を知ることができる 東田和弘・博物館助手は「新入生の入部時期なので、展示で興味をもってもらい、体育会を盛り上げたい」と話す | 5. 3 (水) | 朝日 (朝刊) |
| 44 龍谷大学・森英樹・本学名誉教授に聞く：憲法への向き合い方はいくらでも転がっている。対話することが大切だ | 5. 3 (水) | 毎日 (朝刊) |
| 45 岐阜県の研究所 委託業務の入札結果の3分の2で落札率が99%台と判明：後房雄・法学研究科教授コメント「高い落札率はいかにも不自然で、なんらかの談合が行われていたとみられても仕方がない。県は透明性を高める手立てを講じる必要がある」 | 5. 3 (水) | 読売 |
| 46 ひと：「改憲問題」を出版した愛敬浩二・法学研究科教授 憲法9条には「重し」の意味がある | 5. 5 (金) | 毎日 (朝刊) |
| 47 中部を彩る：福田敏男・工学研究科教授 血の通う医療ロボットに脚光 | 5. 6 (土) | 日経 (夕刊) |
| 48 岐阜県美濃市の善光寺で英霊人形とともに日露戦争で戦死した兵士の記録を詳細に記した記録文書発見：堀田慎一郎・大学文書資料室助手コメント「これだけ保存状態のよい人形はあまりなく、それに合わせて実際の兵士の活動記録がセットで発見されたのは非常に珍しい」 | 5. 8 (月) | 中日 (朝刊) |
| 49 ひきこもり更正支援施設で男性死亡 「権限なく拉致・拘束」：蔭山英順・教育発達科学研究科教授コメント「民間施設は病院のように法律に縛られていないが、隔離や拘束の必要性については専門医の判断が必要だ」 | 5. 8 (月) | 中日 (夕刊) |
| 50 わが子が引きこもりになった時どう対処するべきか：本城秀次・発達心理精神科学教育研究センター教授は「引きこもりと言っても軽い対人恐怖症から精神医学的な治療が必要な場合など多様。ひきこもることで精神的に安定する場合もある」と指摘 | 5. 9 (火) | 中日 (朝刊) |
| 51 ときめき時日記：尾関雄一朗さん・本学学生 一日に3社の面接、疲れた！ | 5. 9 (火) | 中日 (朝刊) |
| 52 名古屋ボストン美術館で開催中の「アルフレッド・スティューグリッツ展」に合わせた講演会「スティューグリッツと20世紀アメリカ文化」13日に開催 田野勲・本学名誉教授が話す | 5. 9 (火) | 朝日 (朝刊) |
| 53 原口紘丞・工学研究科教授と梅村知也・助教授らは、発がんの危険性が指摘される有毒の無機ヒ素を含むヒジキを食べても、体内で毒性の低い有機ヒ素に転換されていることを発見 梅村助教授は「無機ヒ素が有機ヒ素に転換される体内のメカニズムについては、今後の研究で明らかにしたい」と話す | 5.10 (水) | 中日 (朝刊) |
| 54 長野県泰阜村田本の村営宿泊施設で9日、キクイモの栽培・加工を学ぶ研究会が開催され、西川芳昭・国際開発研究科助教授が講演 西川助教授は「住民が手足を動かし、まずは地域おこしの理念を共有していくことが大切」と指摘 | 5.10 (水) | 信濃毎日新聞 |

| 記事 | 月日 | 新聞等名 |
|---|----------|----------------|
| 55 ベストセラーの裏側：速水敏彦・教育発達科学研究科教授著「他人を見下す若者たち」 出版社の想定していた30代後半から50代のサラリーマンや教師ではなく、分析の対象となった若者たちが主な読者層を占め、ベストセラーに躍り出た | 5.10 (水) | 日経 (夕刊) |
| 56 名古屋大学 COE 第32回オープンレクチャー「小説の書き方—バルザックの場合」17日に開催 鎌田隆行・文学研究科講師が話す | 5.10 (水) | 朝日 (夕刊) |
| 57 老年学：井口昭久・医学系研究科教授 物忘れ、あまり恐れずに | 5.11 (木) | 朝日 (朝刊) |
| 58 文部科学省の「06年度科学技術振興調整費・新規課題募集」に応募 日本ガイシ、伊藤忠商事、オリンパス、富士通の4社と連携し、医学と工学の融合に取り組む | 5.11 (木) | 中部経済新聞 |
| 59 生活ウェブ：「根性論」かすんで新・若者論論：速水敏彦・教育発達科学研究科教授は「奥に劣等感を秘め、自信がない若者が目立つ。それでも表向きは偉そうにして格好を付け、背伸びしようとする。こうした“偽りのプライド”を仮想的有能感と名付けた」と話す | 5.11 (木) | 日経 (夕刊) |
| 60 超音波を利用した分離プロセスに関する研究で、川瀬泰人・日本リファイン社長に工学博士の学位を授与 「研究過程で一度諦めかけたことがあったが、安田啓司・工学研究科助教授のアドバイスに助けられた」と話す | 5.12 (金) | 日刊工業 |
| 61 やさしい経済学—人間の心と行動：投資家と株式市場 加藤英明・経済学研究科教授 美人投票と効率性 | 5.12 (金) | 日経 (朝刊) |
| 62 経済産業省は2005年度上期「未踏ソフトウェア創造事業」で「天才プログラマー／スーパークリエイター」に、山本大介さん・本学大学生ら12人を認定 | 5.12 (金) | 日刊工業 |
| 63 科学技術振興機構は原子力システム研究開発事業「基礎研究開発分野」の2006年度新規研究開発課題として、吉田朋子・工学研究科助教授らの「放射性廃棄物エネルギー有効利用のための新技術開発」など32件を選定 | 5.12 (金) | 日刊工業 |
| 64 東海地方4月の地震：林能成・環境学研究科附属地震火山・防災研究センター助手 | 5.12 (金) | 読売 |
| 65 大澤俊彦・生命農学研究科教授と森秀樹・岐阜大学教授らの研究チームは、ごまに含まれる成分で抗酸化作用を持つ「セサミノール」が大腸がんを抑制する効果を持つことを発見 | 5.13 (土) | 中日 (朝刊) |
| 66 大学院国際言語文化研究科主催の公開講座「恐怖を読み解く」6月14日から全10回開催 | 5.13 (土) | 毎日 (朝刊) |
| 67 大阪地裁判決「原爆症不認定処分取り消し」受け、9月結審を控える名古屋訴訟の原告ら手応え：沢田昭二・本学名誉教授コメント「内部被爆の深刻さを指摘した点で画期的な判決」 | 5.13 (土) | 朝日 (朝刊) |
| 68 かがか Cafe：近藤滋・理学研究科教授 動物の紋様形成 カギは波 | 5.14 (日) | 日経 (朝刊) |
| 69 ほとけたちのイメージを探る：宮治昭・文学研究科教授 美術技法の先端をいく中国新疆ミールンの壁画 | 5.14 (日) | 中日 (朝刊) |
| 70 13日、名古屋市など7市町と本学など9大学の学生24人が共同で不法投棄パトロールを行った | 5.14 (日) | 中日 (朝刊) 他2社 |
| 71 やさしい経済学—人間の心と行動：投資家と株式市場 加藤英明・経済学研究科教授 暗闇か灯の下か | 5.15 (月) | 日経 (朝刊) |

博物館からのお知らせ

第9回名古屋大学博物館特別展

「スポーツと名古屋大学 —する・みる・つくる—」

博物館では、第9回特別展の関連特別講演会として「スポーツ科学」を主題にした12回連続セミナーを開催しています。第2回は、4月26日(水)、秋間 広総合保健体育科学センター助教授による「運動、筋肉、宇宙の関係をスポーツ科学の観点から考えよう」の講演が行われました。

続いて、第3回は、5月10日(水)、西田 保総合保健体育科学センター教授による「スポーツモチベーションを探る」と

題した講演が行われました。

また、ヨット部OB会(5月20日(土)、博物館講義室にて)や、少林寺拳法部の演武(6月8日(木)、第三体育館にて)、和式馬術部による流鏝馬(やぶさめ)披露(6月10日、教育学部附属高校グラウンドにて)がクラブデーの一環として行われました。

今後も、関連特別講演会、クラブデー及び名阪戦に関連したイベントが予定されています。



講演する秋間総合保健体育科学センター助教授



講演する西田総合保健体育科学センター教授



流鏝馬(やぶさめ)を行っている様子

博物館で「おもしろ博物学」の連続講座が始まる

博物館では、5月15日（月）から「大学連携講座 おもしろ博物学」として、博物館の教員7名による動物学、植物学、地質学、考古学分野の連続講座（定員60名）が始まりました。これは、3年前から名古屋市生涯学習推進センターと連携して開催している、市民向けの公開講座です。

今年度の第1回は、足立 守博物館教授による「地質と地名から濃尾平野（名古屋）の生い立ちを考える」と題する講演で、濃尾平野の地下構造の話から始め、大曾根、汁谷、清水口、金山、鶴舞、吹上、杖中、末盛、鋳物師洞、常滑、上末、白土、吉良など数多くの地名の由来を、地質と地形の特徴に地域の歴史を交えて、分かりやすく解説しました。

受講者は、謎解きゲームの要素が入った90分の講演を聞いて、「鶴舞という地名の長年の疑問が解けた」、「講座で聞いた話を自分の足で確かめたい」、「東山古窯から出土した土器を博物館で展示してほしい」など、思い思いに感想を述べました。



講義する足立博物館教授



「おもしろ博物学」～名古屋市生涯学習推進センター：大学連携講座～

| 回 | 開催日時 | テーマ | 講師 |
|---|----------------------|-----------------------------------|-----------|
| 1 | 5月15日(月) 13:15～14:45 | 地質と地名から濃尾平野（名古屋）の生い立ちを考える | 教授 足立 守 |
| 2 | 5月22日(月) 13:15～14:45 | 出土資料から昔の食生活を考える | 助教授 新美 倫子 |
| 3 | 5月29日(月) 13:15～14:45 | 岩石と鉱物と化石 ～どうして岩石は硬いのか、なぜ化石はできるのか～ | 助教授 吉田 英一 |
| 4 | 6月5日(月) 13:15～14:45 | 生きている地球 ～中部地方の地質とプレートテクトニクス～ | 助手 束田 和弘 |
| 5 | 6月12日(月) 13:15～14:45 | 伊勢湾・三河湾の海とそこに棲む生き物 | 教授 西川 輝昭 |
| 6 | 6月19日(月) 13:15～14:45 | ニワトリの動物学と名古屋大学 | 助教授 蛭薙 観順 |
| 7 | 6月26日(月) 13:15～14:45 | 東海地方の植物たち | 助手 西田佐知子 |

会場：名古屋大学博物館3階講義室

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

7月4日(火)

場 所：環境総合館 1階
レクチャーホール
時 間：17時30分～19時
入 場 料：無料

第21回防災アカデミー

講 演 者：坪木 和久地球水循環研究センター助教
演 題：未定

[問い合わせ先]

災害対策室 052-788-6038

7月8日(土)

場 所：生命農学研究科附属農場
「農業館」(東郷町諸輪畑尻94)
時 間：14時～16時
定 員：60名
参 加 費：無料

地域貢献特別支援事業

「都市近郊の農業教育公園・講演会」

テ ー マ：地球のもう一つの成功者昆虫に学ぶ
講 演 者：大場 裕一生命農学研究科助手
演 題：光る虫、光らない虫

[問い合わせ先]

生命農学研究科附属農場事務掛
0561-37-0210

7月8日(土)

8月5日(土)

場 所：生命農学研究科附属農場
「農業館」(東郷町諸輪畑尻94)
時 間：10時30分～12時(両日共)
対 象：小学生・中学生及びその保護者
の方で、原則として2回とも出席できる家族

募集人員：約20家族程度
参 加 費：無料

地域貢献特別支援事業

「都市近郊の農業教育公園・農業ふれあい教室」

テ ー マ：蚕を育て見る
内 容：カイコを飼育・観察し、生命の不思議を体験する

申込方法：参加者名、学校名、学年、参加保護者名、連絡先(住所、電話、FAX等)を明記の上、葉書、FAXまたはメールでお申し込みください。

申込期限：6月23日(金)

[問い合わせ先]

生命農学研究科附属農場事務掛
0561-37-0210

7月25日(火)

場 所：高等総合研究館 6階
カンファレンスホール
時 間：17時～

第13回高等研究院セミナー

講演者Ⅰ：石浦 正寛遺伝子実験施設教授
講演者Ⅱ：後藤 節子医学部保健学科教授

[問い合わせ先]

研究協力・国際部研究支援課高等研究院掛
052-788-6051

【訂正とお詫び】

名大トピックス No.156 (2006年5月発行) の34ページ「資料」の一部に誤りがありましたので、深くお詫び申し上げますとともに、下記のとおり訂正させていただきます。申し訳ありませんでした。

役員等

〔誤〕 理事 (財務・事務総括関係担当)・副総長 豊田 三郎
〔正〕 理事 (財務・事務総括関係担当)・事務局長 豊田 三郎

名大トピックス No.157 平成18年6月16日発行

編集・発行/名古屋大学広報室

本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは広報室にお寄せください。

名古屋市千種区不老町 (〒464-8601)

TEL. 052-789-2016 FAX. 052-788-6272 E-mail kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ
(<http://www.nagoya-u.ac.jp/topics/>) でもご覧いただけます。

表紙

初夏の日差しが射し込む
福利厚生施設“FOREST”
(5月リニューアルオープン)。
(平成18年5月30日)



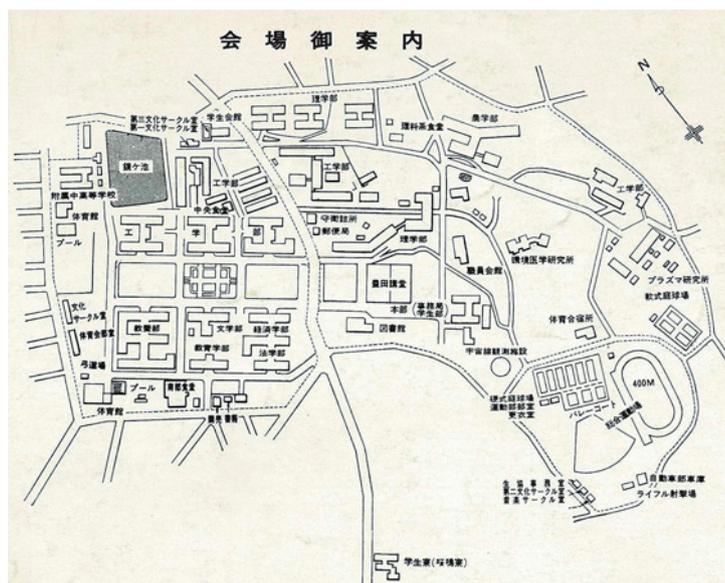
50 第11回名大祭 —1970年代の名大祭—

2006（平成18）年6月1～4日、今年も本学恒例の名大祭（第47回、テーマは夢源^{むげん}）が開催されました。本連載では、ちょうど1年前に第38回（No.145）で第1回名大祭を取り上げました。今回は、その10年後の第11回名大祭のようすを紹介しします。

第1回名大祭は、いわゆる「たこ足大学」の解消（東山キャンパスへの集結）を背景に、「60年安保闘争」問題や伊勢湾台風被災者救援活動などを契機に盛り上がりをもせた「学生運動」の一つの結晶として始まりました。その後、「学生運動」の分裂と混乱の時期を経て、1960年代後半には本学でも鶴舞・東山の両キャンパスで「大学紛争」が起きました。第11回名大祭は、こうした時代状況の中で、「名大祭活動を通じて…自らの学生像を追求してきた。…一人ひとりの学友が考え、悩み、怒り、不満に感じていること、喜びを感じていることを率直に話し合う中で、1970年代の初頭にふさわしい大学祭をつくりあげようとしてきた」(第11回名大祭アピール) ものであったとされています。

「変革にいとむ青春—新しい歴史厳粛に迎える我ら 真理への情熱を燃やし 統一と団結の鉄槌^{てつたい}を鍛えん—」というテーマのもと、第11回名大祭は東山キャンパスを中心に5日間の日程で開催されました。“長いメインテーマと短いサブテーマ”の1960年代とは対照的に、“短いメインテーマと長いサブテーマ”が1970年代名大祭の特徴です。また、5日間の開催期間中、豊田講堂のホールではテーマ講演(全5題)や「情勢講演」「パネルディスカッション」「全学シンポジウム」「全学フェスティバル」などの全学的な規模の企画が日替わりで行われており、1980年代以降の名大祭とも一種異なった1960～70年代名大祭のスタイルを見取することができます。

なお、パンフレット裏表紙に印刷された会場案内図にはほぼ現在の建物配置に近いキャンパスが描かれており、東山地区集結後10年間に施設設備の整備・拡充が急速に進められたことがわかります。



- | | | |
|---|---|--|
| 1 | 2 | 1 第11回名大祭パンフレット |
| | 3 | 2 名大祭会場案内 |
| | | 3 第47回名大祭テーマキャラクター「種」 「メイダイサイドットコム」ウェブページより |

